

問 魚食グルメの開発に際して今後の取り組みは

答 さんまに焦点をあてた

取組みを推進

いる。魚食グルメの開発に際しての今後の取り組みを伺う。



伊藤力也 議員

問 当市は、大船渡市の観光ビジョンを具現化するために、「食の大船渡」のブランド化を推進して

答 市長 大船渡の魚を美味しく食べてもらうことを目的に実行委員会を組織し、フィッシュ&チップスコンテストを実施した。プロ部門の応募の中からグランプリに選ばれた作品が、J Rやホ

テルにおいて商品化された販売・提供された。学生部門の作品は、現在市内2店舗にて販売され、多くの人に味わって頂いている。また、現在取り組んでいるさんまラーメンをご当地料理としてPRしていく。新たな取り組みとして本州有数の水揚げを誇るさんまに焦点をあてた取り組みを推進していく。

観光資源としての海水浴場の回復は

問 綾里海水浴場の砂浜の回復と海水浴場として早期復旧するための今後の取り組みについて伺う。

答 室長 海水浴場の再開に向けて、引き続き災害復旧工事の進捗について情報収集を行いながら、シャワーやトイレについても、今後のあり方や整備時期、財源などの検討を進めていく。併せて、海水浴に適しているかどうかのれき調査や水質検査も行っていく。



綾里海水浴場

問 「小中一貫校」への移行予定は

答 赤崎小学校新校舎開校後

あり方を検討



東 堅市 議員

問 昨年6月に学校教育法が改正されて、小中一貫校の「義務教育学校」が出来ることになった。

答 教育長 建設中の赤崎小学校と中学校の新校舎の開校後、両校の教員同士で教育内容や指導方法等の相互理解を図り、検討

を深めるとともに、保護者や地域住民の理解と協力を得ながら分離型の小中一貫校の実現に向けて取り組みなど、小中学校の適正配置も考慮しながら導入を進めていく。

吉浜の津波石を震災遺構の候補として考えているか

問 大津波から既に5年が過ぎた。また何十年か後、忘れた頃に津波は必ず襲ってくるわけだから、備えとして到達点を

表示したり、遺構となるものを遺すことが大事だ。その際吉浜の「津波石」を遺構の候補として考えているか。

答 室長 吉浜の津波石は津波の威力や記憶を後世に伝える貴重な資料であると認識している。地域からも保存に向けた協力が求められている。被災跡地の利活用と一体的に考えていく必要がある。復興事業の進捗状況を見極めながら保存方法等について地域と一緒に検討していく。



吉浜の津波石



望まれる内陸部へのアクセス向上

問 あの忌まわしい3.11大震災から早くも5年3カ月が過ぎています。他の自治体と比べ、復興



船野 章 議員

問 市内経済活性化と物流・産業の再生について

答 一層取り組みを強化していく

が進んでいるとの評価が大方かと思うが、その実感は無く真の復興ではないという認識である。現在の事業を検証する時、国、県の交付金等による事業をこなしているに過ぎない。

私は震災後に、今後の大船渡市を支える根幹は東北横断自動車道釜石秋

田線への接続と港湾の活用・交流人口の拡大が生き残る道ではないかと継続的に言ってきた。物事は全て布石から始まる。あの当時から先見の明を持っていたら必ずや成果が見えていたと痛感する。アクセスの悪さを打開するため専任職員の配置など手詰まり感をどう打開されるか詳細に伺う。

答 部長 大船渡市では、内陸へ向けて道路ネットワークの構築が課題となっている。岩手県

広域道路整備基本計画において、復興関連の道路整備の位置付けがなく、現時点で事業化の目処は立っていないが、大船渡港の活用や観光振興、救急搬送のため必要不可欠と認識している。昨年は、市内の団体等で要望団を結成し、要望を行ったところであるが、早期整備は厳しい旨の回答が示されている。今年度は、関係機関等でしっかりと検討し、内容を具体的に実現性の高いものにしていきたいと考えている。

(7) 大船渡市議会だより
28.7.20 (No.125)

問 当市は、国際港湾としての大船渡港を最大限に活用したまちづくりを進めてきた。平成27年



今野善信 議員

問 コンテナ航路事業の現状と課題について

答 京浜港で積み替え世界各国とつながっている

度は、貨物量が震災前の実績に戻りつつあり、輸出入のバランスも良く、物流の効率化が図られている。コンテナ航路事業の成否は、当市のまちづくりや経済にとって大変重要であることから、現状と課題について伺う。

答 市長 国においては、京浜港及び阪神港に国内

のコンテナ貨物を集約させ、国際競争力を強化させる方針である。このような中、大船渡港と京浜港を結ぶ国際フェリー・コンテナ定期航路が開設され、平成27年度は輸出が830TEU、輸入が806TEU、合計1,636TEUで震災前の約9割まで貨物量を戻している。

大船渡港での取扱量増加の要因のひとつとして、京浜港で基幹航路へのコンテナ船に積み替え、東南アジア、欧州、米国など世界

各国とつながっていることが挙げられる。デメリットは、京浜港での積み替えに時間や経費がかかること、中国、韓国向けの航路が少ないことである。

答 部長 岩手県内で取り扱われているコンテナ貨物の9割以上が県外の港を利用して輸出入されており、新たに大船渡港にコンテナ貨物を取り込む可能性は十分にあると考えている。官民一体となつたポートセールスで大船渡港の優位性のPRに努めていきたい。



コンテナ積み込み作業